

会報誌連載
200回記念

歴史家

加来耕三氏講演会



『明智光秀』
知将はなぜ
失敗したのか？

「歴史を仕事や日常生活に活用したいと思うならば、歴史に疑問を持ちなさい。そして立ち止まり、よく考えるのです」と繰り返す先生。

会報誌の連載が200回を迎えた記念として、歴史家の加来耕三先生の講演会を開催しました。

新型コロナウイルスの流行で、生活が一変した令和2年。不安を感じながらも今を生きる我々が歴史をどう活用できるのか。歴史から学ぶとはどういうことなのかを話してくださいました。

① 立ち止まって、よく考える

「本能寺の変」の首謀者で有名な明智光秀ですが、そもそも、なぜ織田家に仕えたのか、織田信長に最も信頼され誰よりも早く出世したのになぜ謀反を起こしたのか。そして、なぜ「三日天下」（実質十一日）で終わったのか。「読み解くと歴史にはたくさん『なぜ』が出てきます。皆さんがご存じの歴史は、多くが創作の世

界の内容です。史実ではどうだったのか。歴史から学ぶということ、常に疑問を持ち、立ち止まりよく確認する、そして判断することなのです」と、歴史を現代に活かすにはプロセスを幾重にも考える必要があるとし、光秀の生涯を例に話しました。

② 飛躍する論旨を捨てる

「歴史を読み解く上で注意すべきことは、知性の全くない人が、突然天才になるなどの変身設定です。日本人は、人間が一気に飛躍する物語が好きですから、創作の世界ではよくある話です。しかし、歴史学は裏付けを必要とするので、そこを混同すると歴史からは学べません」と強調しました。

③ 歴史の法則性を参考にする

「暦学では60年を1周期とする考えがあり、2020年は人災最悪の年」なのだそう。「生活が一変するコロナ流行以前に戻りたいと考えても、現実に戻れません。法則性は常に一方向しか向いてい

ませんから。歴史の法則性に従い、立ち止まって考えることは、現状を打破する一つのきっかけになるかもしれません」と言います。

④ 数字を重視して考える

「歴史では、右手は現象で、左手は本質を表します」と先生。「戦い（右手）ばかり見ていると、戦いに必要な資金や調達方法などの本質（左手）が見えてこない。現実の戦いは経済の上に成り立ちますから、歴史から学ぶことは現実的な考え方を持つことにもつながります」と先生。

寛容さは大局観を上回る

⑤ リーダーは寛容であれ

「大局観を全く持っていない徳川家康でしたが、生き残るために寛容になったからこそ、天下統一できたのです。それを見ていたから、周りの人はついて来てくれたのです」と言い、リーダーシップに何より必要なことは寛容さであると訴えました。